メッセージアウトライン
マタイの福音書5：1～5
「心の貧しい者は幸いです」

[1-3]「その群衆を見て、イエスは山に登られた。そして腰を下ろされると、みもとに弟子たちが来た。そこでイエスは口を開き、彼らに教え始められた。『心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちのものだからです。』」

この5章から7章までは山上の説教として知られている箇所である。かなり長く、また深い意味を含んでいることばなので、イエスがたった一回でこれだけのことを全部話されたとは思えない。もしたった一回でこれら全部を話されたのなら、弟子たちも群衆もとても理解することはできなかったであろう。それゆえイエスが語られたこの山上の説教は特定の時にされた一回の説教ではなく、イエスが絶えず繰り返して教えられた話の要約であり、神髄であるということができる。

1節ではイエスは腰を下ろして彼らに教え始められたと書かれている。彼らとは群衆および弟子たちである。イエスの最も近くには弟子たち、そしてそれを取り巻くように多くの群衆がいたのであろう。当時、ユダヤ教の教師が弟子たちに正式に教えるときには座ってから教えたという。イエスも同様のスタイルで教えられた。それゆえ、その内容が重要なものであることがわかる。

3節から12節までが一つのまとまりで「幸いの説教」と言われているが、ここではその前半の5節までを取り上げたい。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人たちの者だからです」(3) ここで言われている「幸い」とは、内にある静かな喜び、人生に起きる様々な出来事や変化に影響されることのない喜びを表している。この世の喜びはやって来て、また去って行く。確実に歩んできた人生が不慮の出来事で崩されたとき、健康が失われたとき、希望がかなえられなかったとき、年老い、愛する者を亡くし、人生の終着駅が見えて来たとき…等々。この世の喜びは過ぎ去っていく。

しかし、まことの神を信じる信仰者は深い静かな喜び、他の何ものも満たすことができない喜びを持つことができる。それこそイエス・キリストとともに歩む者だけが持つ喜びなのである。

それゆえ、イエスの言われる「幸い」とはこのような喜びを意味しているということを私たちは最初に心に留めなければならない。

ではなぜ、心の貧しい者は幸いなのか。この「貧しい」(ギリシャ語で〔ホ・プトーコ

ス])ということばはこの世から完全に見放され、すべての希望を神にかける状態のことをいう。旧約の詩篇でも同じ意味で「貧しい」ということばが何度も使われている。→詩篇107:40～41「主は君主たちを低くし、道なき荒れ地をさまよわせる。しかし、貧しい者を困窮から高く上げ、その一族を羊の群れのように、そこに置かれる」 ここでも「貧しい者」とは神に頼っている無力な人のことを言っている。
それゆえ、この3節では、自分がこの世で生きることにおいて、様々な困難や逆境に直面して、挫折し、絶望し、何もできない、全く無力な者であることを知って、ただひたすら神により頼む心の者は幸いであるという意味になる。
自分が全く無力な存在であることを知って、心を尽くして神に信頼するときに二つのことが起きる。①物への執着がなくなる。それは物質が幸福や安定を真にもたらすものでないことを知るから。
②神にひたむきな愛着を持つようになる。なぜなら神のみが助けを、望みを、力を、慰めを与えることができるお方であることを知るから。
　あのアブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフが物質的なものに頼らないで神にのみ望みをかけ、信頼し、従って行ったときに、どれほど素晴らしい実を結んだことであっただろうか。→創世記
しかし、私たちが覚えておかなければならないことは、この3節が決して貧乏や明日の食事にも事欠くような状態になれということを勧めているのではないということである。
[4]「悲しむ者は幸いです。その人たちは慰められるからです」 ここで言う「悲しむ者」とはどんな人か。人生において悩み、苦しみ、病、苦難を経験してきた人は人生の深みや人の情けを知る。そのような人は幸いであり、慰められるという意味であろうか。しかし、ここでのイエスの教えは人間の心の内奥に関するものであり、イエスがガリラヤ地方で伝道を開始されたときの第一声は「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから」であった。(4:17) そのことから考えると、「自分の罪を悲しむ者は幸いです」となると思われる。自分の罪を悲しむことなしには、人は悔い改めることはできない。自分の心が開かれ、罪とは何か、罪の働きとは何かを知り、それを悲しむときに、そこに初めて悔い改めが生まれる。神は人に全き聖さを求められるゆえ、私たちが他の人と比較して、あの人よりはましだ。私の方が優れていると思っても、神の目から見れば同じ穴のむじなで、罪ある存在であることに変わりはない。

イザヤ64:6「私たちはみな、汚れた者のようになり、その義はみな、不潔な衣のようです」
ローマ3:9~12「では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。まったくありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪のもとにあるからです。次のように書いてあるとおりです。『義人はいない。一人もいない。悟る者はいない。神を求める者はいない。すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない。』」
ローマ3:23~24「すべての人は罪を犯して、神の栄光を受けることができず、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いを通して、価なしに義と認められるからです」

神の御子イエス・キリストが私たちの罪の贖いのために私たちの身代わりとなって十字架にかけられて死なれた。イエスを十字架にかけたこの罪の醜さ、恐ろしさを思うとき、私たちは罪に対する深い悲しみを知る者とされる。しかし、主はそのような者さえ赦し、愛してくださる。そのことが真にわかるとき、私たちは他の人をも赦し愛する者と変えられ、喜び、慰めが与えられるのである。それゆえ、悲しむ者は幸いなのである。

[5]「柔和な者は幸いです。その人たちは地を受け継ぐからです」

「柔和」を辞書で調べると、性質、態度が優しくおとなしいことと説明されている。しかし、聖書が教える柔和はそれだけではない。これは自分という存在が全く神によって支えられ守られ、導かなければならないことを知る謙虚な心と、それゆえの人に対する優しさを意味する。しかし、弱々しい優しさを意味しない。柔和はモーセの特質であり(民12:3)、それはイエスにも見られるものであった。(マタイ21:5、Ⅱコリント10:1) 「柔和な者」それは自我を主張する者の姿ではなく、神のみこころに従う者の姿である。そしてこのような人々は風に吹き飛ばされるもみ殻や根無し草のようになるのではなく、堅実に地を受け継ぎ、神に祝福される者となるのである。

私たちも心を貧しくし、自分の罪を悲しみ、柔和な者とされ、主に従っていきたい。